

称号及び氏名	博士（言語文化学） 奥村 和子
学位授与の日付	平成23年12月22日
論文名	「平家物語の詞章と音韻」
論文審査委員	主査 野田 尚史 副査 張 麟声 副査 田中 宗博 副査 金水 敏（大阪大学教授）

#### 論文要旨

平家物語の数多い諸本が日本文学・日本語史研究において果たす役割は述べるまでもないが、中でもその語りのために施された発音注記や節博士は、当時の音韻・アクセントを考察する上で貴重な史料である。本稿はその数々の特長を生かすべく、平家物語の詞章と発音について考察を行った論文をまとめたものである。

第1部では、史的資料を扱う上で不可欠な諸本の資料性、新古関係についての検討を行った。具体的には、一方流（前田流・波多野流）譜本の中でも古い本とされながらもあまりアクセント資料として言及されることのなかった『筑波大学蔵一方流節付本』『東北大学蔵かたり本』『秦音曲鈔』『昭和女子大学蔵本』について整理し、また筑波本の資料性検討と平行して主としてそこに現れるアクセント面から京都前田流諸本の変遷についての考察を行った。

第2部では、外部徴証等からある程度資料の性格のはっきりしている『尾崎家本平家正節』を資料とし、そこに見られる動詞の近世期京都アクセントについて考察を行った。アクセントを記した文献の中でも、物語形式であって用言の様々な活用形や接続状況の見られる平曲譜本では、動詞のアクセントについて、他の資料に出てこない用例の検討が可能なわけである。いわゆる動詞特殊形アクセントの考察の結果からは、語の機能によるアクセントの使い分けの可能性を示した。

第3部では成立から現代までに音声的な現象から文法的な現象へと変化したと考えられる四段活用動詞連用形の音便について、ハ行動詞を中心に、成立まもないと考えられる平安期、かなり現代と似た様相を示すようになる近世期、そしてその間に位置する平家物語諸本について調査を行い、その音便状況や表現価値に関する考察を行った。複合語の一語化に伴う音変化である音便とそれに伴うアクセント変化との関連、すなわち音便形と非音便形とでアクセントの異なる傾向についても一部言及した。

第4部は、資料の検討や諸本の異同等に見られる特徴を作品解釈に反映させる試み

として、待遇表現や曲節の面から平家物語の人物像に迫ったものである。主観の入りがちな人物像考察における、ある程度客観的な視点の利用は有益なものとする。

それぞれの部立て内の構成及び概要は以下の通りである

## 第1部 平曲譜本資料の検討

### 第1章 前田流平曲の史的変遷

前田流・波多野流分岐以前のものとも言われる筑波大学本について、その内部徴証及び横井也有本・平家正節との比較から、京都前田流のごく古いものであるとの考察を行った。また、アクセント等に関するいくつかの視点から3本を比較整理した。

### 第2章 前田流古譜本一筑波大学蔵本と東北大学蔵本

筑波大学本には白声という曲節が存在せず、それが古譜本であると言われる理由の一つともなっていたわけだが、譜記の酷似する東北大学本との比較を行うことにより、ほぼ白声に相当する記号の存在を指摘した。また、そのアクセント面の比較から、この2本の先後関係についても言及している。

### 第3章 波多野流古譜本一秦音曲鈔について

諸本がほぼ同文同譜と言われる波多野流諸本において、おそらくはその古さ故に異質な存在である秦音曲鈔について、従来行われていなかった譜記解釈を行った。また未発表稿として、その発音注記についての整理を行っている。

### 第4章 昭和女子大学蔵平曲譜本について

従来取り上げられることのほとんどなかった昭和大学本について譜記解釈等を行い、秦音曲鈔との類似点から波多野流古譜本であるとの考察を行った。

### 第5章 平家物語の語りの曲節と人物像

人物像を語る上での客観的な尺度として、話の内容に与えられた曲節を利用しようと試みた。具体例を検討した上で、次のような特徴を人物造型解釈の視点として挙げた。

- 戦闘場面での装束の語りは、それが主人公の装束であるかどうかで曲節が異なる。
- 怒りの場面では、共感できる怒りか権力をふりかざした怒りかで曲節が異なり、その人物への共感の有無がうかがえる。
- 名告りの場面では、好意的・印象的な人物のものに特定の曲節が当てられる。

## 第2部 平曲譜本とアクセント

### 第1章 4拍動詞のアクセント体系について

平家正節における豊富な動詞活用形の用例を用いて、4拍動詞の体系を整理し、またその構成要素となっている3拍動詞2類3類特殊形アクセントについても従来の説の検討を行った。

### 第2章 いわゆる特殊形アクセントについて

動詞未然形、連用形、終止形にある種の助動詞等が下接した場合に現れる、いわゆる特殊形アクセントは、従来下接語の独立性という面を中心に説かれていたが、それだけでは説明できない点があることから、平家正節での調査を行い、アクセントの体系的変化後の一般形と特殊形には、品詞等、語の機能による違いが反映していると考察した。

### 第3部 動詞の音便—平家物語とその前後—

#### 第1章 平安期和文資料における動詞の音便

平安期和文資料 11 種でハ行動詞について調査を行ったところ、ウ音便を起こすのは「思ふ」「給ふ」の2語にほぼ限定され、さらに「思ふ」が音便を起こすのは「思う給ふる」という用いられ方がほとんどであるという結果を得られた。また「給ふる」が衰退するに従い、「思ひ」のウ音便形が他の語に上接するようになり、「給ふ」のウ音便形が見られなくなる。平安期動詞ウ音便の待遇表現的価値について、後世のそれとは異なる事情を考えるべきであることを示した。第2節、第3節においては、源氏物語における「思ひ給ふる」「給ふ」の音便の状況を精査し、そこに反映している表現価値について考察を行なった。

#### 第2章 平家物語における動詞の音便

平家物語におけるハ行動詞音便は、第1章で示した平安期資料におけるそれとはかなり異なる様相を呈する。全体の傾向、際立った特徴を示す会話文における発話者の性別、複数の音便形の存するハ行音便・バ・マ行音便、四段動詞の中で唯一衰退するサ行音便について考察を行った。ハ・バ・マ・サ行音便の考察においては、語形変化とアクセント変化との関係についても簡単に触れ、音便形と非音便形とでアクセントが異なる傾向について言及している。

#### 第3章 近松浄瑠璃における動詞の音便—時代物と世話物の言葉—

近松浄瑠璃のハ行動詞促音便について調査を行うと、世話物よりも時代物に多く見られる。世話物では武士もしくは東国人の、怒りの台詞に多いという特徴が見られるが、時代物では世話物よりも幅広い層の人物に用いられ、また地の文での使用例も多い。近松と近い時代に活躍した紀海音の時代物では促音便の使用はごく少ないものの、語彙、使用する人物層、使用場面などの面で共通するものがある。文語性、漢文訓読調、緊迫した場面、東国、武士といったそれぞれに関連する要素がハ行促音便には含まれ、その要素を近松が表現技巧として用いていたものであろうと考察した。

## 学位論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 奥村和子

論文題目 平家物語の詞章と音韻

### 1. この論文の意義

この論文は、数ある平家物語諸本のうち従来あまり扱われることのなかった譜本の特徴を見ることにより譜本の系統の整理をはかり、また、そうした資料における詞章と譜記、発音注記等の関係を見ることにより当時の音韻について研究を行ったものである。関連する先行研究は多いが、扱うべき対象となる諸本や言語事象は膨大であり、また、資料の性質上、データ化および検索に困難な面も多いため、課題は多く残されている。その空白を丹念に埋めていく作業は、この分野の研究発展のために意義のあ

るものとなっている。

## 2. この論文の総合評価

この論文は、研究対象、データの収集、記述方法、研究結果のいずれにおいても次のように優れており、高く評価できる。

- (1) 研究対象：平家物語諸本の体系を考察する上で重要な位置にあると思われるにもかかわらず、これまでその性質について簡略な記述しかなかった譜本類について精査を行い、また、そうした資料における動詞のアクセント・音便に関して従来より詳細な調査考察を行うことで、新たな観点からの体系の見直しを行っている。
- (2) データの収集：テキスト化の困難な、したがって検索も困難な譜記や発音注記はもとより、テキストを対象とする調査においても、逐一影印等の本文にあたって表記や用法を確認するなど、手間をいとわずに正確を期した用例の収集を行っている。
- (3) 記述方法：いずれの章においても、問題提起から、それに適した方法でのデータ収集および分析を行い、整然とした記述を行っている。
- (4) 研究結果：平家物語諸本の特徴を見極めることにより諸本の体系を整理し、また、それらの資料を利用して従来のアクセント体系記述に修正を加え、さらに音便やアクセントの機能による使い分けの可能性を示唆するなど、各章においてそれぞれ成果をあげている。

## 3. この論文の評価の詳細

### 3.1 第1部「平曲譜本資料の検討」に対する評価

第1部では、従来あまり細かい調査の行われていなかった譜本類を中心に、その資料性の吟味を行っている。筑波大学所蔵本において、従来存在しないとされていた白声という曲節の存在を指摘したことをはじめとする前田流平曲譜本の変遷についての整理、また、諸本すべてが同文同譜とされることの多かった波多野流において異なる特徴を示す古譜本を取り上げての調査記述等は、この分野の研究に少なからぬ影響を与えるものである。

### 3.2 第2部「平曲譜本とアクセント」に対する評価

第2部では、平曲譜本を利用した京都アクセントの体系についての考察を行っている。第1章では4拍動詞の体系整理を行うことにより、従来問題となっている2類動詞のアクセント型および4拍動詞を構成する3拍動詞の特殊形についての解釈を提示し、第2章では特殊形アクセントについて調査分析を行うことにより、その機能による使い分けの可能性を示すなどの成果をあげている。

### 3.3 第3部「動詞の音便—平家物語とその前後—」に対する評価

第3部では、平家物語とその前後に位置する作品について、動詞音便の様相を八行四段活用動詞を中心に詳細に調査し、次のような結果を得ている。

- (1) ウ音便の成立初期と考えられる平安期和文資料においては、ウ音便はイ音便に比べて限定的な動詞にしか用いられていない。
- (2) ウ音便は、ほとんどの場合、敬語と共に用いられている。
- (3) 平家物語においては、発話者の位相によって音便の用いられ方に明らかな差が見られる。(戦う男性は、そうでない男性よりも音便を多く用いている。女性はほとんど音便を用いていない。ただし、八行ウ音便に関してはこの限りでない。)
- (4) 近松浄瑠璃作品においては時代物に比較的八行促音便が多い一方で、世話物ではその使用者が限定されており、促音便に文語・東国・武士の言葉としての表現価値を持たせていたと推測される。

これら一連の指摘自体が一定の成果であるが、さらに動詞による音便化率等をふまえた上でアクセントとの関係にも言及していることは、従来あまり行われてこなかったことであり、評価できる。

#### 4. 人間社会学研究科博士論文審査基準による評価

「人間社会学研究科博士論文審査基準（言語文化学専攻）」の以下の5項目のいずれについても、本論文は十分該当すると認められる。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

#### 5. その他の評価

この論文の内容の一部は、次のような論文として、編集委員による審査を経て掲載されている。

奥村和子「平安期和文資料における八行四段動詞ウ音便形について」『国語語彙史の研究』第20号、pp. 141-154、国語語彙史研究会、2001年。

奥村和子「近松浄瑠璃における八行四段動詞音便形について—時代物と世話物の言葉—」、筑紫国語学談話会(編)『筑紫語学論叢Ⅱ—日本語史と方言—』pp. 175-188、風間書房、2006年。

また、国語学会（後に、日本語学会）の学会誌『国語学』『日本語の研究』の「展望」に第1部第1章、第2部第2章、第3部第2章第1節および第2節の元となった論文が取り上げられ、高い評価を得ているほか、上野和昭氏や薦田治子氏らの著書にこの論文の成果の一部が引用され、評価されている。

これらは、申請者の研究内容が学界から十分な評価を受けていることを示すものである。

## 6. 今後の課題

今後は、この論文の研究を発展させるために研究代表者として獲得した科学研究費「平曲譜本の音形とアクセント—諸本の比較と整理」の計画に基づき、第3部の延長にある音変化とアクセントの関連についてのまとめを行うなど、論文内容のさらなる充実を期すことが期待される。

## 7. 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。